

○お高祖頭巾

岩代 服部 水仙子

「イヨ―酷く別嬪さんが通……」

途端、グイと顎をあげられたので、語尾は咽喉へ引込むでしまふ。三十男の頭を分けて、双子瀬の筒袖羽織を着た具合は、何處か商舗の通ひ番頭といふ見得。

「……仙長の嫁さんでさあ」剃刀を持った儘、反り返つて硝子戸越し、今隣りは呉服屋、天水桶の陰にならうとした後姿を見送つて、主人の早言葉。

「彼女が？あのお小夜さんとか謂つた」と今更に鏡の面を覗き込んだが、表に止まつて居る人ぢやあるまいしと、自分で自分を可笑しむ顔の、出張つた腮は剃あとと青い。と紺足袋に雪駄を穿つた足があまりに踏ばたがつて居るのに氣が付いて、左の手に毛をこする剃刀の隙を、大急ぎで直す、序でに曲つた前掛をも。折から脊の高い茶斑の犬、のそりと現はれて、のそりと消えた。

「長さんは如何してるんだい……亞米利加へ往つた

つけ

「へ？若旦那の事ですかい、ぢやあお前さん未だ知らねえんですね」

「何を？」「死んぢまいやしたぜ」

「えつ、何日？……」

「何日つてお前さん、もう廿日にも……そう〜早いものでさ、今日は丁度三七日ですよ」と切爐の灰を撫で、居た女房が、指を繰つて見て口を挿んだ。

「へへえ、少も知らなかつた、尤も其頃なら留守な時だつたがね」と鏡に寫る主人が不格好な顔を眺めながら白衣の下に着物を幾枚着てゐるかを數へて居る。

「全躰、若旦那の彼の體で勞働なんて無理なんでさあ、お可哀さうに仙臺屋の若旦那ともあろう者が、亞米利加くんだりで骨になつちまふなんて……其れも此れも皆あの後妻のためでさあね」

「また大旦那も大旦那でさ、いくら勝手に飛び出したんだからつて鏢一文仕送り仕ねえなんて、それで彼の次男にはから目が無しさ、へん文學士が聞いて呆れら

あ若旦那があゝした事になつたのも、つまりはあの野郎のお陰なんですか、あのお小夜さんを自分のに慾がつたんで……あのお小夜さんてあ、死んだ御新造の姪に當つてゐるんです。それが思ふやうにならなかつたんで、其後つてものは嬢と二人でお小夜さんに當り散らす、苛める、遂々心弱い若旦那あ見るに見兼て、己が居なかつたら彼等此様と優しい手紙をお小夜さんに残して其儘亞米利加さ、可愛い女房を義弟に呉れるつてんでさ、寧ろ未練が無い様にの心なんでしたらう可愛そうに」

若者が小聲のラツパ節もいつか止むで皆靜に耳を傾けて居る。四間間口の岬床、暫くは髮刈器の音、鋏の響爐の縁、開き過ぎた福寿草のかげには大猫がさも心地宜さそうに眠つて居る。

「お小夜さんも感心さあね、若旦那があゝなつてから出入二年になるのにあゝして指一本觸れさせないで居るんだもの、それだのにお可哀そうに……眞實にあなたのお葬式の時なんざあ、お氣の毒と言つていゝか何て

言つていゝか……」と女房がしみぐ／＼云ふ。

「そうよ、さすがは小針様のお嬢様だわな、悼しい、お若けいのにあのお髪をよ」

「眞實にそうですよ、此様仕つちやつたんですよ」と持つて居た煙管で鬚を切る眞似して見せる。

「それに如何ですえ、可愛さ増つて憎さが百倍ですね、云ふことを聞かばよしだったのが、そうなつたもんだから……お小夜さんも意地になつたんでせう……遂々離縁ですとさ、それも呆れるぢやないか未だ一七日も過ぎないうちの話なんですと」

「せめて廿一日過ぎる迄はとお小夜さんが頼みに頼んでもう今日が廿一日でさ」女房が猶も言ひ續け様とした時、

「や 來やしたよ！」と若者の聲。言ひ合さず表に皆目を向けた。さる程に、心強かるとも見えぬ吾妻コーナー姿嬾々と、打見たところ二とは越えない、さぞや香の香の染みて居るであらうと思はるゝ手先に一寸袖口をからめて、捲つて、鬚に高かるべき空色縮緬のお高

祖頭巾は、まことひつそりと。 夫の墓前に、花を手向
けて、香を焚いて、今日を限りの別れの涙はさぞやと
合掌のぬかづき姿しのぼする伏目勝ち。やがて影は見
えなくなつた。

「あゝあの姿も今日限り見ることが出来ないのかねえ」
さすがに女、女房はほろりとした。

過失で溢れたやうに、霰はハラ／＼と降り出した。

【入力者注】底本は総ルビでしたが、
一部のみ残しました。

底本：「女子文壇」明治四十年六月

テキスト入力：小林 徹

公開：令和六年九月十六日

[水野仙子作品年譜](#)

[水野仙子ホームページ](#)